



シモマッチの 校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男 前岩手県立花巻北高等学校長

第10回

学校組織は人体に似ている？

□「分業」は効率的かもしれないが…

学校では、教務、進路、生徒指導などの校務分掌が決められ、仕事が分担されています。それによって業務は適正に処理され、学校運営がスムーズに進んでいきます。特に調査、報告、周知という点では、分掌による業務分担制は強い効力を発揮します。

現在各学校における校務分掌は、文部科学省↓教育委員会↓管理職↓職員↓生徒、といった、教育現場における一つの指示体系の中で、ミスを防ぎ、効率的、機能的、専門的に業務をこなすために編み出された最適なシステムなのかもしれません。

しかし、一方、このような領域分担型のガバナンスに対する不安もあります。それは、領域分担主義が強まると、その専門性にたけた教師が出現する一方、「これは私（たち）の仕事ではない」という、自分の範囲だけをまかなえばいいという視野狭索性や、互いに相手の領分に口出ししないといった排他的な空気が生まれてしまうという

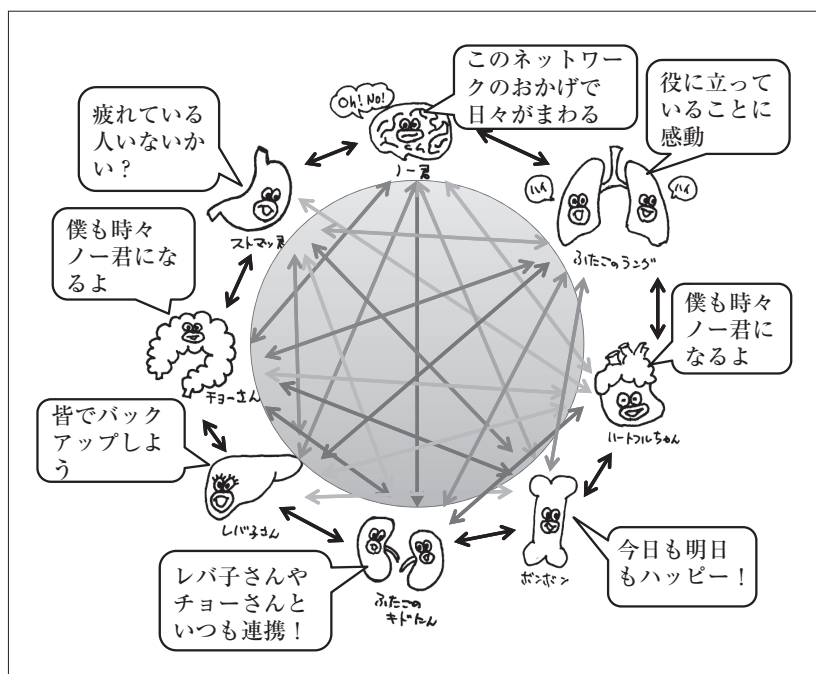
恐れます。

また、前例や定型による処理に縛られ、思考停止に陥り、そこに潜む価値を掘り起こすことができなくなってしまうという懸念もあります。

その結果、重要な案件が放置されてしまうことにもなりかねません。そして、深刻な問題や、「本当に大切なこと」は領域の隙間に落ちるものです。

東日本大震災の津波のときの行政の問題はそこでした。非常時において次々に生じる事案は、必ずしも各領域が保有する従来のタスクの範囲に収まるものではなかった。

では、誰かがコントロールタワーになって、あらゆる問題をどこかの領域に振り分けなければならないという考え方もありません。私はそれにも疑問があります。例えば、グローバルリテラシーの育成といったとき、そこには様々な切り口があるわけですから、それを、国際教育だからそれは英語科の領域である、などと一面的な捉えでカテゴライズされることによって、本来持つて



いる概念や理念が矮小化されてしまうと思うのです。

大切なことは、領域が重なり合い、補完し合うこと。時にその属性の鎧を捨てて本音で語り合うこと。そのことによって、タスクは「やつつける」ものから、「切り開

く」もの、「みんな事にする」こと、という価値あるものに変わり、職場の同僚性も生まれていくはずですよ。

□ 本来の「コミュニティ」

最近、私は学校とは人体のようなものと考えてるようになりました。人体

には、手、足、目、鼻、など様々なパーツがあり、それぞれには役割が分担されています。内臓もそうです。胃、肝臓、小腸などにもそれぞれの役割があります。しかし、それらは、パーツとして独立して機能しているものではありません。

A・キンブレル著の「生命に部分はない」の訳者である、福岡伸一氏は、プロローグの中で、人間の首が一定の範囲にしか動かないことに触れ、「つまり制限があるゆえに、身体の他の部分協調的な動きが促される」「生命とは全体として一つ

のものだ」と述べています。

人体のそれぞれのパーツは、独自の機能を分担させられているけれど、しかし、それらは相互に補い合いながら一つものになっているということ。これを読んだとき私は、まさに学校の組織も同じことが言えるのではないかと膝を打ちました。

分掌、学年、教科など、それぞれが、独自の役割を持ちつつ、さらに全体がつながり合ってこそ、学校という生命体が存在するのではないかと。だから、どこか一つ具合が悪くなれば、それはそのセクションだけの問題にとどまらず、全体の不調を招いていくことになるでしょう。

とすれば、学校経営で必要な視点は、セクションの専門性を強く確かなものにするだけでなく、互いの連携、相互乗り入れの仕組みをどうつくっていくかではないでしょうか。

私は、そのためにはまず、学校を対話のコミュニティにすることが大切ではないか、それが健康で強靱な組織をつくる条件ではないかと思っています。